超絶望的な絶望都市の人間動物園

一刀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
超絶望的な絶望都市の人間動物園

【Ｎコード】
Ｎ６５７４Ｔ

【作者名】
一刀

【あらすじ】
ある日、とある学校でバラバラになった生徒の死体が発見された。その生徒は、生前に《人間動物園》という不可解な言葉に脅えていたらしい。
ミステリー愛好会に所属する高校生、神宮蓮。
オカルト研究部に所属する大学生、桐野竜也。
２人の最強コンビは《都市伝説》の謎を追う。

0001　白い部屋

チェーンソーがうなり声を上げる。
その音は、けたたましく白い部屋で轟いた。
天井も壁紙も白い部屋――床と扉だけが茶色で、他のすべてが白色の部屋には、窓が無かった。しかし、何故か監視カメラのような物が幾つも取り付けられていた。
「た……助け、て」
白い部屋の中央にいる男が声をしぼりだしたが、ほとんど声にならなかった。
「とらわれの人間よ」
男と向かい合うように黒色の白衣の男がいた。顔面には、あろうことかガスマスクを装着していた。
「……時間だ」
低い声でガスマスクの男が言った。
「ま、待ってくれ……！　何でもする！　だから助けてくれ！」
男が決死の表情でせがむ。
男のその声を待っていたかのように、男はガスマスクの中で、にやり笑った。
「何でもする？」
ガスマスクの男が、わざとらしく繰り返した。
その意味深な行為に、男は悪寒を感じたが、今は自分の命が大切だ。手段は問わないことを割り切らなければ、ならなかった。
「ああ、何でもする」
だから命だけは助けてくれ、という男の言葉を無視し、ガスマスクの男は、無言のまま、手にしていたチェーンソーの電源を切り、椅子に縛られている男の膝の上に置いた。
「なら、殺せ」
「殺せ？　誰を？」

男の表情が強張る。同時に、男の背筋に冷たい汗が流れる。
「誰だと思う？」
「……わからない」
少年のその返答に、ガスマスクの男は特に反応を示さなかったが、どこかガッカリしたような様子を見せた。
「誰だと思う？」
この極限状態において、同じ質問を2度され、男はとてつもなく恐怖し、困惑していた。だからこそ、口を滑らせてしまったのだ。
「お、……お、お前」
普段なら男は手で自分の口を無意味に抑えているだろう。しかし、ロープで拘束されているので、気休めの行動もとることができない。
「なかなか、面白いことを言うじゃないか」
ガスマスクの男は何度も深く頷いた。
「でも、残念」
両腕を交差させ、バツ印を作った。黒の白衣にガスマスクという男がすると、とんでもなく奇妙であり、滑稽でもあった。とらわれの男も、これがテレビで見ているバラエティ番組なら、ビールを飲みながら、大笑いしているだろう。
「殺されるのは、君だよ、君」
ガスマスクの男は残酷にも冷徹にそう言い切った。
「自分で自分を殺すか、長い間じっくりと痛めつけられるか、どっちがいい？　どちらにせよ、痛みは伴うけどな」
「……」
男は答えなかった。
ガスマスクの男は、部屋に幾つもある監視カメラの1つに顔を向けた。
「どっちに賭ける？　俺は黒で」
『あら、黒？　どうして？』
ガスマスクの男が耳につけているイヤホンから、若い女性の声が聞こえた。

「こいつ、結構面白い奴だぜ」
監視カメラから視線を外し、歯をガタガタと震わせている男を見た。
『そうは見えなかったけど。まあ、ライヴと中継は違うし、あなたが言うなら、そうなのかもね』
「姐さんは？」
ガスマスクの男は腕を組んだ。
『あたしは――そうだねえ、赤にしとくよ』
「結局赤にするのか」
『まあね』
「これで赤連続５回目だ。アタリも５回連続なるか？　いくらなんでも……そろそろ黒が出るんじゃないか？」
『どう考えても、一般的には、赤の確立の方が高いって』
「まあ、それはそうだな。だが、確率論だけがすべてではない」
『そうね』

それから３０分が経過した。
あの白い部屋は、赤い部屋へと変貌していた。
「ああ、畜生！　期待はずれかよ！　今度こそ黒だと思ったのに！」
ガスマスクの男が元白い部屋――赤い部屋――で嘆いていた。
『残念だったわね。これで赤が６連続ね。だから、赤にしておけば良いと言ったのに……』
「まあいい。もうすぐだろ？　＜パーティ＞の開始は？」
『＜パーティ＞の開始？　もう＜パーティ＞は始まっているわよ』
「何だと？」
ガスマスクの男が声を曇らせた。
白い部屋は、飛び散った肉片と血で、夜空に浮かんだ赤い月よりも、紅く染められていた。

0002　たがが延長線

神宮蓮（じんぐうれん）は学校の教室で大きなあくびをした。
「高校生活ってのは……こんなにもつまらないものなんだね」
蓮は少女のような可愛らしい声で言った。
「……かもな」
隣にいる少年――鬼崎飛鳥（きざきあすか）が気だるそうに言う。
「つい半年前までのエキサイティングな日々が懐かしいよ」
蓮は目を閉ざし、2、3秒した後に目を開けた。
「ああ、あの時は――楽しかった」
鬼崎は無言のまま小さく頷いた。そしてほとんど開けることの無い口を開けた。
「だがな」
「ん？」
「高校生活も捨てたものじゃない……かもな」
「何か面白そうなことでもあるの？」
蓮の大きな黒い瞳が輝く。
「蓮は都市伝説は好きか？」
「どちらかと言えば、嫌い」
「だろうな」
蓮の気持ちよいとは言い難い返事に鬼崎は表情を変えなかった。
「ちょっと来い」
鬼崎がそう言い、座席を立った。
小首をかしげながら蓮は鬼崎に続き、2人は教室を後にした。
神宮連と鬼崎飛鳥は出会ってから半年の仲である。中学三年生の夏ごろに初めて出会い、不思議と意気投合し、今でも一緒に行動することが多い。
奇人『ハンニバル』と呼ばれる蓮の容姿は、極めて中性的で、少し長めの黒いくせ毛と大きな黒光りする瞳が特徴的だ。そのため、

未だに性別を間違われることが多い。『蓮』の字を『連』と間違われることも多い。

異性にもかなり好かれやすい彼だが、不思議な奴、とよく言われることがある。

退屈と不毛が嫌いな男――神宮蓮は常軌を逸する行動を平然とやってのけるからだ。その具体例を1つ1つ上げると切りがないのでやめておくが、クラスの端っこにいる平凡な少年と呼ぶ者は誰もいないだろう。蓮自身は自覚がなく、自分のことを普通の高校生を思っているが、誰も咎めたりはしない。中性的な容姿とやわらかい雰囲気が、その要因だろう。

そんな蓮とよく行動している鬼崎飛鳥は、蓮と同じく、蓮以上にクラスで浮いている存在だった。

異様に長い黒髪もそうだが、生気が宿っていないような、死んだ魚のような目が異質な雰囲気をかもし出していた。

勉強もスポーツも必要以上にすることを拒む。しかし、勉強もスポーツも全国トップクラスの成績を残している（スポーツにおいては、個人プレイしかしないのだが）。

蓮以外の人間と話すことも殆どない。他人と深い関係を持つことをよしとしない性格らしい。学校も欠席がちで、わざわざ自分で出席日数を計算しているらしい。生まれながらの『天才』の頭脳によれば、ほぼ労力を必要としないのだろう。

神宮蓮と鬼崎飛鳥は、クラスのはみ出し者、それだけの理由で繋がっていた。

神宮蓮と鬼崎飛鳥は、クラスのはみ出し者、それだけの理由で繋がっている。

蓮と鬼崎と一部の人間を除いた者は、そう思っている。

しかし――彼らの繋がりはそれだけで成り立ってはいない。

蓮は鬼崎に連れられ、屋上に来ていた。

屋上では、ビュービューと音を立てて、少し強めだが、心地よい薫風が吹いている。
上を見上げれば、雲1つない快晴の青空。端の柵に身を乗り出せば、下にはグラウンドが広がっていた。昼休みということもあってか、グラウンドには大勢の男子生徒がたむろしていた――蓮や鬼崎には関係のないことだった。遠くには小さくなった数多くのビルや住宅が見えた。その付近の上空を2羽のカラスが、もめごとをしてるかのように飛んでいた。
2羽のカラスの姿もだんだんと小さくなり、やがて見えなくなった。
「面白そうな話って何？」
蓮が鬼崎に話しかける。
死んだ魚の目が蓮の方を向く。
「何、半年前の推理ゲームの延長線さ」
「奇怪な事件には、奇人の探偵が必要だろ？　――ハンニバル」

0003　ジャメヴ

「バラバラ死体ね……最近の世の中はやけに物騒だな」
桐野竜也はお世辞でも綺麗とは言えないアパートの一室で、コーヒーをすすりながら、新聞の記事を読んでいた。
『<マンション一室でバラバラ事件>
昨夜未明、●●一××のマンションの一室にて、手足を両腕とも切断された男性の遺体が発見された。被害者の名前は岩城正志（31）。部屋には血痕は残されておらず、殺害現場は別の場所であると――』
「まったく酷いことをする奴もいるもんやなあ。人間をばらすなんて――バラバラ死体……バラバラ死体か…」
桐野は記憶の奥深くにある思い当たる事柄を探索する。
「何か、そんな都市伝説があったはずやな」
オカルト研究部の同輩に聞いた都市伝説だったはずだ。
しかし思い出せない。
「ま、ええか」
たとえ、どれほど物騒な事件でもオカルトに思考回路を持って行ってしまう自分は不謹慎だなと思いながら、自虐的に苦笑した。
「ちょっと、それ、見せてよ」
姉の響子がそう言い、手をのばしてくる。
ちゃぶ台のようなテーブルで、桐野と響子は向かい合わせという状態で朝食をとっていたので、いとも簡単に響子の手が新聞をつかむ。
「待ってぇや！　まだ途中までし――」
「――大学生になっても、ガキだなあ、竜也」
響子は強引に新聞を取った。いや、盗った。もしくは『獲った』。
桐野の新聞をつかむ力は変わらなかったが、彼女にとっては気にするほどのものでもなかった。

「……」
「……」
響子は黙々と新聞の記事を読む。
「女より弱いということで、俺のプライドはズタズタ何ですけど」
「あんたが弱いからじゃん。その理由は」
「うっ……」
「大丈夫さ、あたし以外の女には、そう負けないだろ？」
「……」
「何だ！　その黙りこみは！　まさか……あんた……」
「いやいやいいやいやいあや。そ、そんなわけないだろ？」
桐野は呂律が回らなくなった。しかも標準語になってる。
「動揺しまくりじゃん！　言葉もおかしいし！」
「いや、これはホンマに違うんや！　誤解やねん！」
「ほう。偽りであると？」
「そや、偽りや。俺は姉ちゃんのせいで女が苦手やねん！　別に女に負けてるわけちゃうねん！」
「青二才が！　戯言をほざいている暇があったら、勉強しろ！　留年したら殺すぞあんた」
「青二才ちゃうわ！　もう２１歳や！」
「嘘をつくな！　２１にもなって女に興味がないだと？　もしくは２１のくせに女性不審か、あんたは！」
もう１つ、２つほど響子に言いたいことがあるのだが、桐野は言わなかった。ボロアパートとはいえ、ここの家賃は響子が払っているからだ。
「もうええわ」
ちちが上がらないと判断した桐野は、席を立ち、コーヒーカップを台所に置くと、外出の支度を済ませた。
「んじゃ、学校行ってくるわ」
「とっとと出ていけ」
「それが実の弟に対する態度なんか！？」

「なら家賃、あんたが払いな」
「鬼かいな！　あんたは！」
「ホモ野郎のあんたよりかは、鬼の方がましだね」
「くっ……」
桐野はどうせ、俺の人生なんてこんなもんだ、と心の内で吐き捨てながら大学に向かった。
しかし、何かよくわからないが、彼は違和感を覚えていた。今朝の日常に。
（何か気持ち悪いねんな。すっきりせえへん……）
今朝のことをもう1度思い出す。
特に変わった点は無い、と思う――多分。
（こういうのを……ジャメヴっていうんやろか？）

０００４　我が轟は猫である

轟優香（とどろきゆうか）はハンバーガーショップで、少し遅めの昼食をとっていた。
午後２時前――あと十分もしない内に２時になる。
紺のブレザーに、グレーのプリーツスカートという極めてありきれた制服を身にまとっている優香は、大きなため息をついた。
優香の前には、テーブルを挟んで、優香と同じ制服の女子高校生が座っていた。
「だからさー。好きならさ、好きです。て言えばいいじゃん」
うんざりした顔で、優香が言った。今日このフレーズは何回目だろうか？　１ヶ月のトータルならば、とうに１００は越えているだろう。
「優香は簡単にコクれって言うけどー、口にするより行動する方がずっと難しいんだよ？」
「告白ってのは、口でするもんでしょ。普通」
「むー！　他人事だと思って！　さっきおごってあげたシェイク代返してもらうよ？　なんなら、今優香が食べてるハンバーガーも」
「……」
優香はクラスメイトの西谷可奈（にしたにかな）の恋愛相談を受けていた。今回で通算９回目の恋愛相談だった。
「ねえ」
可奈が言った。
「ん？」
「明日、神宮くんの好みのタイプ聞いてきてよ」
ブッー！　とまるでマンガのように、優香は飲んでいたシェイクを噴き出した。その口から出てきたシェイクは、当然のごとく重力に逆らうことはできずに、テーブルにぶちまけられた。
「ちょっと、優香、大丈夫？」
あーあー、呟きながら可奈がテーブルをポケットティッシュで拭

く。
「『大丈夫？』じゃないでしょ！」
優香の顔は羞恥でなのか必死だからなのか、まるでたこのような色の赤面になっていた。
「なな、な、何で、私が、そんなことを聞かないといけないのよっ！」
「えー、駄目なのー？　優香なら引き受けてくれると思ったのになー」
可奈がわざとらしく口先を尖らせる。
「じゃあさ、駅前の牛丼屋で鰻丼おごるから！　ね？　どう？」
「駄目」
「駄目なの？」
「駄目」
「どうして？」
「だいたいなんで牛丼屋で鰻丼なのよ！　しかもなんでまた食べ物なの！？　私はそんなに食べ物で釣られる女って思ってんの？」
ツッコミを我慢しようとしていた優香だったが、はやくも限界がきた。

可奈の恋愛相談を受けている内に、夕方の6時を過ぎていた。
夕日が建物を茜色に染めていて、ところどころ反射した光が、ぎらぎらと輝きながら目に入ってきて眩しいい。
あのあと優香は、牛丼屋に連れて行かされ、無理やり鰻丼をほおばされ、駅の本屋では恋愛テクニックがどーのこーのという本の立ち読みに付き合わされたのだった。結局、3、4冊ほど可奈は恋愛関連の書籍を購入していた。何故かそのうち1冊を「優香に好きな男の子ができたときのために」と言われ、強引に渡された。優香は興味が無かったが、お金は可奈が払ったので、捨てたり、返品せずに置いておくことにした。
今はその帰り道である。可奈とは家の方向が多少違うため、今は

優香1人だった。
「ふぅー、もしかして、私っていいように利用されてる？」
優香はため息をつきながら家族と温かい夕食が待つ家へと帰って行った。
「まいっか！　可奈とは幼馴染だし、私も助けてとは言ってないけど、助けられたことはあったしね！」
家についた優香は、自分で自分を納得させ、深くも浅くもない睡眠へと堕ちた。
その睡眠で不思議な夢を見た。
内容はあまり思い出せないのだが、やや印象に残っているフレーズのようなものがあった。

轟優香は猫だ。
気ままで、友達を助け、気ままで、他人を助け、気ままで誰かを見捨てる。
自由に行動し、予定は未定。
世の中に『絶対』はなく、すべては『偶然』だと思っており、しかし、それすらも深く考えず、気ままに生きる。
周りに流されることも無いが、周りを引っ張ることもしない。
自分のためにも、他人のためにも生きず、ただ気ままに生きる猫。
その猫は轟優香である。

0005　起動

昼過ぎに、黒い長髪の少年は起床した。
上半身だけを起こすと、あくびをかみ殺し、目あにをこすりとった。
「……」
やがて寝床から起き上がった少年は、1台のノートパソコンの前の椅子に座った。回転式の黒色の椅子で、幼稚にも足で床を蹴り、自身の体ごと椅子を回転させる。
その作業を何度もしながら、ノートパソコンの起動を待った。
「……」
無言で。
やがてノートパソコンが起動し、少年は慣れた手つきで要求されているログイン用のパスワードを入力した。
＜ｕｎｏｗｅｎ＞
と少年は入力し、エンターキーに小指で軽く触れる。
正常にログインできたのを確認すると画面の右上にある＜たんていごっこ＞という圧縮ファイルを解凍する。特殊な圧縮ファイルらしく解凍にも見慣れないソフトを使用していた。
＜たんていごっこ＞を解凍すると＜たんていごっこ＞というファイルが通常形式でデスクトップに出現した。解凍された＜たんていごっこ＞をダブルクリックし、開くと＜ついおく＞、＜つーる＞、＜ユーエヌ＞という3つのファイルが出てきた。＜ついおく＞と＜つーる＞、＜ユーエヌ＞は、ぞれぞれ異なるタイプの圧縮ファイルだった。少年はそれらの解凍に必要なソフトを迷いもせずに選択し、1つずつ解凍していく。
彼の記憶を証する＜ついおく＞。彼の技術を証する＜つーる＞。彼の二つ名を証する＜ユーエヌ＞。これらのファイルは、それぞれ異なるタイプの圧縮ファイルだった。それ以前に、3つのファイル

が入っていた<たんていごっこ>自体も圧縮ファイルであった。これは、この<たんていごっこ>のファイルを誰か意図的に封印したと考えられる。その誰かとは――少年だろうか。
少年はかつて封印されていた――解凍されたファイルを見て、親しい旧友に再会したような気分になった。普段は感情の変化が殆ど見られない少年だったが、今日、すくなくとも今は、とても興奮していた。しかし、それは少年自身が感じていることであって、周囲から見れば、いつもの無表情に等しい顔と何の変りもないと思われてしまうだろう。
それでも少年は構わなかった。いや、気にするほどのことでもなかった。
空気中にうかんでいる塵のように、どうてもいいことなのだった。
「警察……いや――ハンニバルの先を言ってみせよう」
あらゆることが『どうでもいい』この少年にも『どうでもよくない』ことは存在した。それは謎解きを誰よりも――警察よりも探偵よりも神宮連よりも解くことだ。
普段、独り言すらも発しないほど無口な少年は、珍しく落ち着いてられなかった。
別に焦っているわけではなく、単純に推理が楽しみで楽しみで仕方がないのだ。武者震いに近い震えを少年はしていた。けれども、これは武者震いなどではない。
探偵震いだ。

鬼崎から『ある都市伝説』の話を聞いた翌日の朝、神宮蓮は見た目はいつもと変わらない校門に違和感を覚えた。
（これは――血の臭い？　相当な量な気がするなぁ……）
見ずともわかるのは、もはや天性の素質などではなくて、経験して得た素質のおかげだった。
死体を見るのに慣れてはいないが、見てもさほど動じることはな

い。
が、今回ばかりは蓮も驚愕した。
「え……人間……？」
生徒の悲鳴が絶えない中、蓮の視界にドス黒い肉の塊が見えた。
それは人間と表現するには、あまりにも原型を留めていなかった。
吐き気には襲われかけたが、実際に吐くまでにはいたらなかった。
しかし、首筋から二の腕にかけて鳥肌が立った。鳥肌が立った感覚が、やけに生々しく感じられた。
神宮連は恐怖しているわけではいなかった。
彼は絶望していのだ。
希望の無いところに絶望は無い。
つまり彼は微かな希望を見つけ、どこかの場所でＰＣを弄っている少年と同じく興奮しているのだった。
死体を見て興奮したわけではない。
昨日、屋上で鬼崎から聞いた『ある都市伝説』――人間動物園（にんげんどうぶつえん）――が実在することが自らの眼（まなこ）で視界に捉え、判明したことに興奮したのだった。

0006　どうでもいい

自分でも聞こえる音を立てながら、蓮は唾を飲んだ。
その視線の先には――人間の原形まるで留めていない赤黒の肉の塊。おまけに肉の塊には、チェーンソーが腹部と思われる部分に突き刺さっていた。四肢がすべてバラバラとなっている全身から血液が地にあふれていた。しかし、血液はすでに乾いているようだった。
鼻を刺す強烈な異臭が漂っていた。同じく鉄のような血臭さがする魚屋の比ではなかった。比べるに値しないレベル――もはや月とすっぽんだ。
腹は縦に切り裂かれ、手で握りつぶされたようにぐちゃぐちゃな内臓が、辺りに飛び散っていた。医療系のテレビドラマを出演者目当てだけで見る、フィクションの血ですら無理な人が見たら、気を失ってしまいそうだ。無理、でなくとも苦手な人も一発ＫＯだろう。
見慣れない遺体に惑う生徒達。しかし、その中には、野次馬も何人かいた。騒ぎを聞きつけたのか、高校生や教師以外の人々もちらほら見えた。
泣き崩れる者、こんな機会でも少しでも目立とうとする者、どうしたらいいのかわからず、ただ立ちすくむ者。様々な人間がいた。
神宮蓮はその中の、どれにも属さなかった。
彼は野次馬のふりをしつつ、できるだけ目立たずに、状況を確認しようとしていた。が、まもなく警察が来てしまった。もうこれ以上、状況を詳しく観察することは望めない。
数人の警官が野次馬達の間を割入って来た。他の警官は野次馬達を追い払ったり、立ち入り禁止の黄色のテープを張る準備をしていた。
「おいおい……」
警官の１人――それなりにキャリアがありそうな中年の、小太り気味の警官が思わず呟いた。

「ひでえな……」
小太りの警官は、それ以上言葉を発することができなかった。
「とにかく現場と遺体の検査をするぞ」
もう1人の、この中では一番古株であろうと思われる警官が、周囲の警官に呼びかける。
彼らは上司にあたる警官に了解の返答にし、作業を始めようとしていた。
その時。
「ケンちゃんッ！？　ケンちゃんなんでしょ？　ねえッ！」
警官達を突き飛ばしながら、1人の女生徒が現れた。
彼女はその場で顔をくしゃくしゃにして泣き崩れてしまった。恋人を失ったショックを受けたことと恋人の遺体をまともに直視できない自分に嫌気が差したのだろう。
警官達は彼女をなだめるように話かけ、上手い具合に立ち入り禁止区域から追い出した。初めに到着した警官達よりも少し遅れて、バイクで到着した2人の警官達が、その女生徒から何か情報を聞きだすために、これもまたなだめるように話かける。当然、現場からも野次馬達からも少しばかり離れた場所で。

警察による緻密な捜査によって被害者の名前が判明した。
猿山健吾（さるやま けんご）。
高校2年生、17歳。サッカー部に所属していた。同じく高校2年生の道井瑞希（どうい みずき）と今年の2月から交際していた。
クラスではお調子者で、教師や他の生徒を困らせることもあったそうだが、サッカー部の部員とは仲が良かったらしい。ちなみにあだ名は『ケンちゃん』
恋人ないし『元』恋人である道井と猿山とサッカー部の部員達に聞きこみ調査を行った。高校生といえど、高校生だ。彼氏や親友を殺すことが無い、とは言い切れない。つまり彼らも立派な容疑者なわけだ。警官達は表では、そんなことを一言も言わないが。

他は担任やクラスメイト達を対象にして聞きこみ調査が、行われた。ある種の尋問、と言ってもいいかもしれない。
しかし、結果的に有力な情報を手に入れることはできなかった。判ったのは、彼の人間関係くらいだった。
サッカー部員の誰かが、『人間動物園がどうたら……って怯えてたらしいッスよ』という発言をしたらしいが、警官達は聞き流すだけで、気にもしなかった。

そういえば、どうして道井瑞希は、あの遺体が猿山健吾と判ったのだろうか。親しい者しか知らないような特徴が無いわけでは無いはずだが、あれだけバラバラで、血まみれで、内臓ズルズルの遺体を判断できるだろうか。警官を突き飛ばすくらいパニックに陥り、泣き崩れてしまうくらいのショックを受け、ほとんど遺体を直視できなかった彼女が。
緊急下校となったので、いつも通り、蓮は鬼崎と帰路についていた。蓮はその時に、先ほどの事を鬼崎はどう思っているのかどうか、聞いてみた。
「どうでもいい」
案の定、こんな返答が返ってきた。が、
「ことはない」
蓮はにやりと笑った。
そうだろ？　その通りだろ？　どうだい僕の観察力は？　と言いたいのこらえて、蓮は
「で、どう思う？」
と尋ねた。
「俺はどうとも思わないが、こんなことを聞いたことがある。たしかあの時、お前には話してなかったはずだ」
「どんなこと？」
蓮は真っ黒な瞳を輝かせながら、興味身心そうに言った。
「あくまで噂なんだが――」

「――人間動物園の奴らのイニシャルを取ると、＜ＮＩＮＧＥＮＤＯＵＢＵＴＵＥＮ＞になるらしいぜ」
鬼崎は氷のような表情を変えぬまま、そう言った。

0007　ロクデナシドモ

蓮は自宅に着いた。昼前のことだった。
冷房を入れていない家の玄関すら涼しく感じるほどに、外の気温は高かった。
緊急下校となり、家からは出るなと言われたが、何かすべきことはあっただろうか？　ひとまず、蓮は記憶を巡ることにした。
学校側の指示をおとなしく聞いて、家で読書にでもふけるか――それとも、ミステリー愛好会の連中と今朝の事件について語り合うか――
「さて、どうしようか」
どうするかを考えているながら、スマートフォンでネットサーフィンをしていると1通のメールが届いた。
送信者は野口佳代（のぐちかよ）だった。蓮が所属しているミステリー愛好会の同輩にあたる女子である。
＜件名：緊急連絡＞
その件名に蓮は眉をひそめた。
＜唐突で申し訳ありませんが、下記のＵＲＬのチャットルームで緊急会議を開きます。神宮蓮君のログインパスワードは＜ハンニバル＞です＞
わりと短いメールだった。続きはチャットルームにて行うということらしい。
「参加が前提なんだね」
蓮は苦笑しながらＵＲＬを確認した。
「ハンニ……バル、と」
蓮専用のパスワードを入力すると無事にチャットルームに入ることができた。
すでにチャットルームには、３人の同志が集まっていた。

＜お、来た＞
＜……４人目＞
＜集まるの早ェな＞
次々と文字が現れる。
左下にある＜現在の入室者＞の覧を見ると、＜ハンニバル＞の他に＜ＡｚＬ（アズル）＞、＜罰桜（ばつざくら）＞、＜フェンリル＞のハンドルネームがあった。
＜こんにちは。佳代ちゃんは？＞
と蓮はキーボードをたたく。
＜てめえの彼女ちゃんは死にました＞
フェンリルだった。
＜ふーん。罪桜（つみざくら）は？＞
と慣れた手つきで打つ。
＜おいおい、シカトかよ。お次は罪桜に乗り換え佳代＞
＜シカトはしてないよ＞
＜『かよ』を『佳代』ってウケを狙ってわざと間違えたなら、追放させてもらうぜ＞
ＡｚＬが割り入って来た。
＜わざとじゃないって、ただのタイプミスだっての＞
＜チャットとはいえ、誤字脱字には気をつけた方がいいかと。読む側の気持ちにもなってくださいね、ワンちゃん＞
＜誰がワンちゃんだってんだよ。バーカ＞
大雑把なフェンリルと神経質なＡｚＬは犬猿の仲だった。フェンリルとは北欧神話に登場する狼のことだが、
＜お前のこと。フェンリルなんて大層な名前はいらんでしょうに＞
とＡｚＬはいつも小馬鹿にする。
他のメンバーが来るまで、先ほどのような他愛のない会話が繰り広げられていた。
５分後に＜罪桜（つみざくら）＞。さらに１０分後に＜黄泉行き列車＞そして＜

ゲスト＞が到着した。
＜遅くなってすみません。せっかくなので、ゲストさんにも来ていただこうと思いまして……思ったより時間がかかってしまいました＞
　ゲストを除くと、黄泉行き列車――このミステリー愛好会のマネージャー的ポジションの野口佳代が最後だった。
＜おせーぞー。死んだかと思ってたぜ＞
　フェンリルが罵声を浴びさせる。
＜まったくひどい奴だな。この馬鹿犬は。まるでしつけがなってない＞
　すかさず、ＡｚＬが挑発する。この２人を見ていると、蓮はいつも吹きだしそうになってしまう。
＜何か言ったか？　４つ目ヤローのＡｚＬ君＞
＜４つ目でメガネヤローと表現したいみたいだけど、残念ながら君が使うとセンスがないな＞
　言葉に多少の違いはあれど、毎度、毎度こうなるからである。１度、ネット上で顔を会わせるだけで、
一体何回、このくだりをするのだろうか？
＜誰がしつけたんだろうね＞
　蓮は吹きだしたいのをこらえて、キーボードをたたいた。
＜俺の親＞
　当たり前だろ、と言わんばかりに、返答された。
＜当たり前のことじゃん。面白くねー＞
　ＡｚＬだ。パソコンを使いなれているらしく、キーボードをたたくのがかなり早い。
＜だから君にはセンスがないんだよ。笑いも勉強も、推理もな＞
＜運動音痴のてめーには言われたかねえって＞
　段々激しいマシンガントークになりつつ中、
＜仲が良いことは悪いことではありませんが、罵り合いはオフでしてください＞
　冷静に佳代が沈静化させる。この流れはいつものことだ。だから

佳代もこの2人を冷静に対処できるのだろう。
急に2人が何も打ち込まなくなった。佳代の言葉が効いたのか、ロックを掛けられたのかはわからない。
＜それでは、今朝の事件について会議を始めましょうか＞
会議と捜査、推理の参加を断ることはできない。それが、ハンニバルこと蓮が所属するミステリー愛好会の1番重要で、絶対に破ることのできないルールだった。

0008　ヤバイやつ

今朝、高校の生徒が殺されたらしい。
帰路に就いた轟優香と西谷可奈は、遺体をしばらく眺めていた中性的な容姿をした少年と異様に長い黒髪の少年の2人のことを思い出していた。
「あの女の子みたいな男の子が神宮――誰だっけ」
優香は思い出そうとするふりをした。彼女は神宮某のことに、あまり興味を持っていないらしい。
すると、可奈がやけにニコニコ顔で答えてくれた。
「神宮蓮君だよ」
「そんな名前だったわね」
登校時間が少し遅めの優香と可奈が学校に着いたころ、大量の野次馬が寄りたかっていた。なので、彼女達は近くから遺体を見ていない。野次馬の多くが吐き気に襲われていたようだったから、もしかすると虐殺事件だったのかもしれない。
「そういえば、告白はどうなったの？」
優香が興味無さそうにに尋ねた。
「あのね、優香……今日は学校で生徒の遺体が発見されたんだよ？告白なんて無理に決まってるじゃん！」
そりゃそうだ。
「ん……その通りね」
優香はあくびをかみ殺しながら返事をした。
「その通りね、って……まったく、他人事だと思って！」
「他人事でしょ。どう考えても」
可奈は何か言いたそうな顔をしていたが、彼女は言葉を発することができなかった。
2人が十字路にさしかかったとき、彼女達からみて右側の曲がり角から、制服を纏った少女が不意に現れ、危うくぶつかりそうにな

ったからである。
「ッ！」
少女も優香達に気付いたようで、反射的に足を止めた。結果的に、3人ともが、十字路の角で立ち止っている形になった。
優香は少女を足から顔へと緩慢な動きで見た。
見覚えはあるが、知らない顔だった。
その少女は、まだらに染められた髪をポニーテールにしており、両目にそれぞれ異なる色のカラーコンタクトでもしているようで、右目は紅く、左目は蒼かった。肌は褐色で、健康的な小麦色に焼けていた――非常に派手な容姿の少女だ。ちなみに制服は優香や可奈と同様のものだった。どうやら、同じ高校の生徒らしい。
「危ねェな、おい」
先入観を持つことは良くないことだが、優香と可奈の予想は的中していた。彼女の性格や口調についての予想である。
「す、すいません」
とにかく係わるとろくなことが無さそうなので、適当に謝って（可奈が）さっさとこの場を去ろうとした。
「そ、それでは」
これは優香。早速、歩を進めようとする。ワンテンポ遅れて可奈も優香にならう。
「ちょッと、待て」
可奈が足を動かす前に、まだらポニーテールの少女に呼び止められた。
「何か用でしょうか？」
面倒なことになりそうだな――優香は悠長なことを考えながら、言葉を返した。
「素敵なお2人さんにちょッくら質問させてくンねェかなァ？」
質問？　いくらカツアゲできるかどうかでも聞くのか？　そんなこと聞かなくていいのに。今、優香と可奈、2人とも財布を持ち合わせておらず、しかもその中身もスズメの涙ほどしかなかった。優

香はともかく、可奈も先日のハンバーガーショップや恋愛に関する書籍が効いているようだった。
「何、たいした用じゃないンだけどよ。今朝、学校の生徒が殺されてただろ？」
優香と可奈は黙って頷いた。
「なンか情報を持ってねェかな？　って……な」
情報って……あなたはどこの組織に属しているんですか。
「いいえ、私達は何も知りませんね。誰が殺されたのかも」
可奈はすっかり固まってしまっているので、優香が代弁する。
「あァそう」
「ええ」
「何も知らないのか……。じゃ、これで失礼させてもらうぜ」
「では、私達も」
危険な人には係わってはいけない。優香はその場をなるべく早く立ち去りたかったので、今朝の事件について何も知らないということは、好都合だった。別に嘘をついても良いのだが、何故かついてはいけないような気がした。嘘をつく程度のことで、罪悪感を覚える轟優香では無かったはずなのだが。
「ああ、もう1つ質問いいか？」
まだらポニーテールに背を向けた直後に呼び止められた――やっぱりカツアゲ？
「別に大丈夫ですよ」
優香は精一杯の笑みを浮かべながら振り返った。
「いや、どうでもいいことなンだけどさ」
「はい、何でしょう？」
優香は自分の心臓の鼓動が高くなるのを感じた。
「――神宮蓮って知ってる？」
彼女のこの言葉を聞いたとき、優香の心臓の鼓動は静まり、安堵に包まれ、それまで、まばたき1つしなかった可奈の目が大きく見開いた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6574t/

超絶望的な絶望都市の人間動物園

2011年10月16日03時26分発行